76　誌上発表

耳鳴について

三浦　　喬
日本鍼灸研究会

はじめに

「耳鳴」は，現代医学では，外界からの音刺激がないにも関わらず，耳に自覚的に感じられる一切の音感覚のことをいう．耳の病證は中国でも古代から重視され，耳聾，耳鳴，耳痛などの病證の弁別，あるいは『素問』脈解篇に「所謂耳鳴者，陽気万物盛上而躍，故耳鳴也」とあることからもわかるように，耳の病の機序についても研究されている．そして，病證やその機序が体系的に記載されるようになる隋唐期になると，耳の病の認識も格段に深まり，例えば『諸病源候論』では，様々な病門を立てて，これを論じるようになる．更に南宋の『三因極一病證方論』に至ると，内因（七情），外因（六淫），不内外因（飲食，労倦など）のいわゆる「三因論」によって更に詳しく論じられるようになる．今回は「耳鳴」について『諸病源候論』と『三因極一病證方論』の二つの医書に見られる経文から，耳鳴の「病機」「病因」「部位」「症状」「経過」「脈状」について検討し，考察を加える．『諸病源候論』には東洋医学善本叢書第6冊所収本と『周氏医学叢書』所収本を，『三因極一病證方論』には東方医学善本叢刊第4冊所収本を使用した．

結果

『諸病源候論』で「耳鳴」が記載されている経文は，悪風候，諸癩候，寒食散発候，腎病候，耳鳴候，小児雑病諸候の一つとしての耳鳴候，中風掣痛候の8篇に見られる．「病機」は，①悪風によって人を食する蟲を生じ，それによって腎を傷られた際，②犯触した際，③寒食，労（坐），房室不節の際，④腎気，宗脈，血気，津液などの不足，⑤小児における頭脳への風の侵襲，の5種である．「病因」は，①悪風，②五蔵（腎，肺），③経脈（腎，肺，小腸，大腸，膀胱，三焦），の3因である．「部位」は，①骨髄，②皮膚からの侵襲，③頭脳，④耳，⑤腰，⑥背中，⑦胸，の7部位である．「症状」は，①小さく聞こえる，または聞こえない（聾），②大きく聞こえる（雷声，耳鳴嘈嘈），③耳からの黄汁，④眼に光（『脈経』「光明」に作る）を感じる，⑤掣痛，の5症状である．「経過・予後」は，悪風を生じ，皮膚の裏に入り，四肢，経脈，五蔵に侵襲し，腎膀胱，肺大腸，膀胱三焦，気血宗脈，津液などが虚すと予後不良になり，聾へと変わる，とする．「脈状」は浮沈のみが取り上げられている．「治法・養生法」は，『素問』四気調神大論から「冬三月，此謂閉蔵，水冰地坼，無擾乎陽，早臥晩起，必待日光，使志若伏匿，若有私意，若已有得，去寒就温，無泄皮膚，使気亟奪，此冬気之応也」を引いて，病機，病因の排除，節制などが記載されているが，その量は多いものではない．

『三因極一病證方論』巻之十六・耳病證治では「耳鳴」の記載は見られず，代わりに「耳聾」の記載が6条ある．「耳聾」は，『諸病源候論』巻四十八・小児雑病諸候・耳鳴候に「邪気與正気相撃，久抑邪気停滞，皆成聾也」として，「耳鳴」の症状が予後不良の際に「耳聾」となるとの記載があるように，「耳鳴」とつながりがあることは古くから認識されているので，「耳聾」を介して，「耳鳴」を治療する上での手がかりに迫ることが示唆されていると考えられる．

考察

『諸病源候論』を「三因論」で分類し直すと，外因や不内外因は見られるも，内因の記載は見当たらない．また『諸病源候論』における「耳鳴」の病機解析は，陰陽虚実寒熱など陰陽論からの説明が中心であるが，『三因極一病證方論』では，腎を中心とする説明に力点が置かれていることに特徴がある．